

障害者支援活動における共同性の形成

— 障害者をめぐる地域活動を事例として —

一橋大学大学院 加藤旭人

1 目的

本報告の目的は、障害者、支援者、家族、ボランティアといった多様な行為者が出会い関わりあう活動の中からいかにして共同性が形成されるのかを、行為者による活動への意味付けから明らかにすることである。

従来の障害者支援に関わる研究は、福祉制度に着目したマクロな研究、あるいは障害者、家族、施設、介助関係といった個別の対象に関するミクロな研究が中心的になされてきた。しかしながら、障害者と地域社会の関係性について、とりわけ障害者をめぐる地域活動が果たす、障害者、支援者、家族、ボランティアといった多様な行為者を結びつける側面については、これまで十分に論じられてこなかった。本報告では、上記の課題に対して、障害者をめぐる地域活動を対象として、多様な行為者による活動への意味付けに着目することで、複雑な意味の交錯の中から共同性が形成されるプロセスを明らかにする。

2 方法

対象となる障害者をめぐる地域活動は、障害者の余暇支援を目的として障害当事者や家族を中心として結成された任意団体である。毎月2回、市内の公共施設において、重度知的障害者を対象とした音楽活動やスポーツ活動が行われる。

報告者は、活動に参加するなかで、しばしば「地域」が強調され、また「地域」が活動に参加する多様な行為者に受け入れられている点に強い印象を抱いた。では、活動にとって「地域」とはなんなのか。この点を活動の担い手の経験から明らかにするために、活動場面（音楽活動および定例会議）への参与観察および、家族や支援者やボランティアへの聞き取り調査を行った。

3 結果

調査の結果、以下の点が明らかになった。第一に、地域活動における「地域」に対する意味付けは、障害者、支援者、家族、ボランティアといったそれぞれの立場によって異なっており、しばしば対立する要素も含んでいた。具体的には、支援の場／遊ぶ場、有償労働／無償労働、自発性／単なる居場所などといった対立する要素を含みこみながら、「地域」が意味付けられていた。第二に、そのような対立を含み込んだ上で、なお「地域」という点において、多様な行為者が合意を形成している点が明らかになった。すなわち、障害者をめぐる地域活動において、「地域」という側面は、対立を含みこみつつもそれを超えて多様な行為者を結びつける役割を果たしていた。

4 結論

以上の結果から、障害者をめぐる地域活動において、多様な行為者が対立を含みこみつつも合意を形成している「地域」の重層性が明らかになった。すなわち、障害者をめぐる地域活動における「地域」とは、多様な行為者が対立を含みこみつつも合意を形成する重層性を有しており、この点において多様な行為者の共同性が形成されていると捉えられる。